

現代青年の自立性に関する研究 (5) — 交流分析における透過性調整力を含む自我状態と自立・自律性 —

A Study on Independence of Modern Adolescents (5): The Ego-State with Permeability Control Power on Transactional Analysis and Autonomy

菱 田 陽 子*¹ 野 口 喜美代*²

要旨

菱田ら (2011) は、作成した自立・自律性尺度と TEG II による自立・自律類型と考えられるエゴグラム類型との関係から、青年の自立・自律性の様相について検証したが、本研究では、桂ら (1997) による PC エゴグラムを用いて透過性調整力を測定し、その高低と自立・自律類型との関係も加えて分析を行った。透過性調整力が高ければ非自立・非自律型であっても自立・自律性の様相を示すことを予想したが、「影響受けやすさ」、「対人協調」、「やる気なさ」等をはじめとしていくつかの自立・自律性因子において、類型間の違いがみられたものの、透過性調整力との明確な関連を示すことはできず、いくつかの課題が残った。

キーワード：現代青年 (学生) [Modern Adolescents (Students)] /

自立・自律性尺度 (Autonomy Scale) / 交流分析 (Transactional Analysis) /
透過性調整力 (Permeability Control Power) / 自我状態 (Ego-State)

I 問題

筆者らは、先の研究 (菱田ら, 2011) で、自立・自律性尺度と、交流分析で示される自我状態との関わりを検証しつつ、青年期にある大学生の自立・自律性の様相を呈示することを試みた。

自立性の定義については先行研究でも様々に行われているが、本研究では、筆者等の先の研究の定義を引き続き定義とし、先の研究の自立・自律性尺度で測定する自立・自律性と、交流分析のエゴグラム類型、更に透過性調整力 (permeability control power: 以下 PC と略記する) を加えた交流分析のエゴグラム類型との関係を分析・検討し

たい。

本研究における自立とは、菱田ら (2010) など考えた「他者との関係を保ちながら、自らの考え方や行動の仕方に関して、他者の考え方や行動を参照することはあっても、他者からの明確な独立性を確保し、自らのもつ内的基準に照らして吟味し、自ら選択・決定する傾向であり、自分の力で、自らの責任を自覚しながら、考え、判断し、行動することが出来ることをいう。その際、自ら必要な支援を求めることを含む」とする。交流分析のエゴグラムは、指紋のように、同じパターンは出現しない、とデュセイ (1980) が述べているように、限りのないパターンが存在するが、本研究では、東京大学医学部診療内科 TEG 研究会 (2006) (以下「TEG 研究会」と略記する) の 29 類型を基本として青年の自立パターンを想定し、分析しようとしている。以下、CP、NP、A、FC、

*1 HISHIDA, Yoko

北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科

*2 NOGUUCHI, Kimiyo

学校法人片山学園富山クリエイティブ専門学校

NPO 日本交流分析協会北陸支部長

ACの5つの自我状態の解釈はTEG研究会による。

本研究では、先の研究(菱田ら2011)に引き続き、交流分析のエゴグラムとの関連をみようとしている。先の研究で述べているように、「エゴグラムの創案者であるデュセイ(1980)は、エゴグラムについて、エネルギーがまったく無い領域、例えばAが0であるようなエゴグラムの場合は、確かにその人は不幸であるし、1つの領域が非常に優勢で、他の面を不均衡な形で支配している場合は、ゆがんだパーソナリティであると述べている。更に望ましい形のエゴグラムとして「A」が最も高く、「NP」「FC」が側面に適度に高く、「CP」「AC」が低い緩やかな山型(デュセイはベル型と言っているが)と「CP」「NP」「A」「FC」「AC」がほぼ同じような平坦型の2つの型をあげている。但し、この2つの型のうち、緩やかな山型は、調査対象の学生の論理的、客観的に判断する「A」の低さが想定されることもあり、このエゴグラムを示す青年は少ないと考えられる。青年の自立性は、大人の自立性に比べ、その成長段階、彼らの環境、実際に生きている経験の少なさ等からまだ未熟であると考えられる。このことを加味し、ここでは、「大人の自立」に向かっている心性も青年の自立性に加えて検討する。

更に、先の研究結果を考慮に入れ、10人以上の分析対象から、現代青年、主に大学生の自立・自律類型を想定すると、①他者肯定の構えの「NP」の高いNP優位型、②感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」の高いFC優位型、③周囲に適応し、従順ではあるが、自己否定の構えの「AC」が低いAC低位型、④自分の価値判断を正しいものとして譲らず、理想を追求し、自分に厳しく、他人にも厳しい他者否定の構えの「CP」と、「FC」が同程度に高く、「NP」「AC」が相対的に低い、FCの高さに特徴をもつ逆N型II—FC・NP、⑤論理的、客観的に判断する「A」が十分に高くはなく、親切で寛容的、他者肯定の構えの「NP」と感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」の高いM型、の5パターンを現代青年の自立・自律類型と想定し、PCの高低類型も併せて、自立・自律性尺度との関係を検証することにより、自立・自律性因子とエゴグラムの関係に関する予測の実証を試みたい。

菱田ら(2011)は、自立の中心に、「適切な依存」を含む「対人協調」と「独自性」を考えており、本研究では、適切な依存と甘えに関する項目について再検討している。

「独自性」について、筆者らは、自立・自律性はその人らしく個性を生かした生き方を支えると考えており、その人らしい個性を「独自性」と捉えているが、「独自性」のもつ側面として、自分の意見の主張なども含まれると思われる。TEGにおいて、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」は心の元気さの指数とも考えられており、「独自性」と関わりと予測されるが、FC優位型は、未成熟な幼児性としてわがまま、腰の軽さと風評される面ももっているため、先の研究では、各自立因子との関わりをほとんどみることができなかった。本研究でもそのことが予測されるものの、バーンも「FCは素敵なエネルギーである」と述べているように、分析結果に期待できないことも想定しつつ、特に青年の自立・自律性には有益な自我状態と確信し、注目している。

更に、ここに青年の自立・自律類型にFC優位型を加えた理由として、先の研究でも述べたが、筆者らの学生指導の現場において、明るく楽しく生きている学生が授業や就職活動の問題、友人との人間関係の解決を測る力が強いことを感じていることも挙げられる。自立性のエネルギーの基本は「FC」のエネルギーの高さではないか、とも考えている。交流分析理論として、セルフコントロールがなされている自立・自律類型に向かうには、「FC」の自我状態を上げることが、その方法の1つであるとされていることもFC優位型を青年の自立・自律類型の1つに加えた理由である。

青年、主に学生の自立・自律類型を想定する際、自己否定・他者否定の構えの「AC」「CP」が高いパターンは除外した。自己否定・他者否定の構えは、自分も他人もOKであると考えられる交流分析の自律性理論では、非自律と考えられ、望ましい自立性を阻害するであろう。但し、交流分析理論では、それぞれの類型に肯定と否定の両面を意味づけしており、自立・自律性と非自立・非自律の想定にも分析結果の読み取りにも柔軟性と慎重さが必要であると考えている。この意味で、自分にも他人にも厳しく、自分の価値観を相手に押しつけ

る反面、目的が高く、理想を迫り、リーダーシップを発揮するとされる「CP」の高いCP優位型については、先回同様、非自立・非自律類型と想定しているが、分析結果の読み取りに注意が必要であると考えている。他人の言うことに左右され、主体性に欠け、すねたり、ひねくれたりする偽りの反抗を示すとされる「AC」の自我状態については自分の気持ちを隠し、幼稚な忍耐や怒りとなることもあり、自分らしく生きる望ましい自立を阻害すると考え、非自立・非自律の典型と想定している。

以上の予測をもとに調査・分析し予測の立証を試みる。

II 目的

本研究の目的は、菱田ら(2011)の結果を考慮しつつ、現代青年の自立・自律性と想定したTEG類型とPCの高低別類型が、筆者らの自立・自律性因子の特性とどのように関わるのか、どの自立・自律性特性を有する自立・自律類型であるのかを明らかにすることにある。更にPCが高ければ、自立・自律もしくは非自立・非自律類型に関わらず、対人適応、社会適応するという理論にもとづく分析結果も期待している。

具体的には、それぞれの自我状態(CP, NP, A, FC, AC)にもとづく青年の自立傾向を示すと我々が想定した5類型、更にPC値を含む10類型、非自立・非自律傾向を示すと我々が想定した24類型、更にPC値を含む48類型と、自立性8因子との関係を明らかにする。

即ち、先の研究に引き続いて、これら自立・自律性傾向を想定した類型を示す者は、適応した自立・自律性傾向を示すと考えられ、自立傾向を示すと想定した類型間では、それぞれの特色を示す自立性因子との関係があると予測されるが、これを確認することを目的とする。

III 方法

調査対象及び調査実施時期

4年制大学、短期大学、専門学校の学生・生徒計473名を対象とした質問紙調査を実施し、26歳以上の者並びに、無回答項目が極端に多いなど、明らかに不適切な回答をされた者を除き、412名

(4年制大学生126名(男26、女100)、短期大学生166名(男5、女161)、専門学校生118名(男33、女85))とした。男子合計64名、女子合計348名、平均年齢18.81歳、標準偏差1.10歳である。

エゴグラムについては、回答漏れを除き395名(男58、女337)を分析対象とした。調査実施は2013年7月。

調査内容

菱田ら(2011)の36項目に、新たに「適切な依存」と思われる項目10項目、「不適切な依存」項目(甘え)と思われる項目8項目を作成追加し、計54項目(4件法)からなる項目を自立・自律性尺度として使用した。これとは別に、菱田ら(2011)が作成した不適切回答点検のための14項目(4件法)を順不同で配置した。更に透過性調整力とエゴグラムをみるために新版PCエゴグラムⅡ型の70項目(3件法)を使用した。なおフェースシートとして、学科、学年、性別、年齢を尋ねている。

調査方法

各大学、専門学校の授業中に、筆者が作成した実施手引きに従って、それぞれ授業担当者が実施した。

IV 結果と考察

1. 回答の有効性

先の場合と同様、自立・自律性尺度については、菱田ら(2011)の不適切回答点検のための項目による点検により、分析対象は412名になった。

2. 自立・自律性尺度の検討

菱田ら(2011)を再検討した自立・自律性尺度項目54項目について、最尤法による因子の抽出、プロマックス法による軸の回転を行い、最終的に8因子解を得た。

それらの因子は、依存に関する2因子以外、先の菱田ら(2011)と類似した因子構造を示した。

具体的には、「他人と違っていても、私自身の考え方が大切だ」、「自分ならではの好みや考え方がある」などからなる「独自性」因子、「自分の将来のことをよく考えている」、「将来何をしたいのかについて考えをもっている」などからなる「将来展望」因子、「周りの人の意見に流されやす

い]、「簡単に周囲の人の影響を受けてしまう」などからなる「影響受けやすさ」因子、「家から自立するには何が大切かを知っている」などからなる「自立認識」因子、「どんなに困った状態になっても「助けて」とは言いたくない」、「自分でどうにもならないのに、他人に助けを求められない」、「人は、何をすることも他人の助けを借りないですむよう頑張るべきだと思う」などからなる「自立こだわり」因子、他人の気持ちを思いやることのできる]、「周りの人と協力して物事に取り組むことができる」などからなる「対人協調」因子、「何かに挑戦するとか、困難を克服することを考えるより、人に頼って楽に過ごしたい」、「面

倒だと思ふことは、自分でやるより人にやって欲しいと思うことが多い」などからなる「やる気なさ」因子、「状況にあわせて感情をコントロールすることができない」、「つい感情にまかせて行動してしまう」などからなる「感情非統制」因子の8因子であった (Table 1)。

各因子の下位尺度を考え、その内的整合性を示すChronbachの α 係数を求めたところ、独自性 $\alpha = .74$ 、将来展望 $\alpha = .84$ 、影響受けやすさ $\alpha = .78$ 、自立認識 $\alpha = .76$ 、自立こだわり $\alpha = .64$ 、対人協調 $\alpha = .68$ 、やる気なさ $\alpha = .66$ 、感情非統制 $\alpha = .62$ であり、いずれの因子も一応の信頼性を確認できた。

Table 1 自立性の因子構造 (最尤法 プロマックス回転)

項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
57 他人の考え方ではなく、自分なりに考えて、生きていきたい	.693	-.036	.024	.001	.000	-.055	-.006	.005
56 他人と違っていても、私自身の考え方は大切だ	.681	-.018	-.054	-.021	-.067	.030	-.002	.018
40 自分ならではの好みや考え方がある	.520	-.051	-.107	.028	.053	-.016	-.035	.046
35 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	.511	.028	-.053	-.058	.005	-.016	.047	-.112
9 これまでにはこだわらず、自分が良いと思ったことをしている	.448	-.126	.030	-.060	.044	.151	.091	-.036
63 自分なりの価値判断の基準を持っている	.411	-.077	-.115	.067	-.080	.004	-.011	-.031
18 他人が何か言っても、自分の意見が変わらないことが多い	.363	.098	-.314	.024	.205	-.096	.016	.100
6 自分が将来何をしたいのかについて考えをもっている	-.067	.818	-.086	-.055	-.030	.027	-.052	-.006
52 将来の目標がなかなか定まらない	.070	-. 792	.078	.110	.083	.012	-.007	.050
43 自分の将来のことをよく考えている	.058	.742	.063	.056	.049	-.029	-.024	.034
30 将来に対する見通しや考えをもって生活している	.080	.685	.101	.140	.054	-.036	-.043	.018
22 周りの人の意見に流れやすい	-.049	-.046	.793	-.014	-.022	-.074	.033	.005
10 簡単に周囲の人の影響を受けてしまう	.053	-.026	.774	-.051	-.012	-.001	-.037	.108
1 相手の意見にすぐ納得してしまう	-.098	-.018	.675	.058	-.017	.031	-.121	.001
42 友だちと議論していると、相手の方が正しいと思ってしまう	-.176	-.006	.448	-.015	.027	.021	.028	-.044
45 家から自立するには何が大切かを知っている	.096	.033	.055	.845	-.024	-.036	.037	.079
27 精神的に自立するには何が必要かを知っている	-.057	-.025	.000	.708	.153	.111	.050	-.077
5 一人暮らしがうまくできるには何が必要か分かっている	-.052	-.028	-.019	.631	.060	.073	-.021	.096
68 どうすれば経済的に自立できるか、よく分からない	.052	-.021	.152	-. 548	.310	.199	.084	.115
67 どんなに困った状態になっても、私は、誰かに「助けて」とは言いたくない	.069	-.007	-.101	-.158	.758	-.004	-.106	.001
59 自分でどうにもならないのに、他人に助けを求められない	.034	-.091	.027	.023	.573	-.184	-.025	.023
26 どんなに困っている時でも、人に助けて欲しいと言うのは、努力が足りないように思う	-.074	.152	.130	.099	.443	.030	-.086	.123
36 人は、何をすることも、他人の助けを借りないですむように頑張るべきだと思う	.045	-.025	-.019	.165	.435	.107	.145	.041
50 親は、いざとなれば私を助けてくれる	.163	.046	.049	-.019	-. 360	.207	.073	.098
4 周りの人と協力して物事に取り組むことができる	-.056	-.041	-.038	-.051	-.051	.766	-.002	.021
17 周りの人とよい関係を維持することができる	-.028	-.012	-.059	.131	.026	.561	.046	-.079
3 自力ではどうしようもないと行き詰まった時には、私を助けてくれる人がいると思う	.077	.014	.025	-.050	-.241	.518	.037	.095
25 他人の気持ちを思いやることのできる	.062	-.018	.082	.031	.073	.380	-.052	-.164
32 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	.191	.087	.109	.110	.068	.314	-.107	-.159
41 何かに挑戦するとか、困難を克服することを考えるより、人に頼って楽に過ごしたい	-.225	.023	-.172	.036	.113	.074	.782	-.056
24 面倒だと思ふことは、自分でやるより人にやって欲しいと思うことが多い	.157	-.047	.067	-.019	-.111	-.034	.547	.118
8 掃除や洗濯など自分でできるものでも、誰かにやって欲しいと思う	.077	.034	-.048	-.011	-.125	.010	.466	.029
65 世話をやいてくれて、私を楽にしてくれる人が欲しい	.094	-.033	.046	.027	-.078	.004	.433	.105
21 行事のときなど、自分からは何もしないことが多い	.197	.021	.180	-.025	.041	-.304	.335	-.187
49 自分でやりかたを考えるより、誰かに指示されたとおりにする方が好きだ	-.137	-.012	.298	-.013	.079	-.034	.327	-.062
66 状況にあわせて感情をコントロールすることができない	-.042	-.023	-.032	.049	.097	-.020	.065	.777
34 友だちに頼りすぎる傾向がある	.183	-.069	.051	.032	.065	.092	-.002	-. 540
48 つい感情にまかせて行動してしまう	.127	-.035	.149	.040	.039	.030	.002	.489
因子間相関	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII
独自性		.141	-.250	.329	.068	.248	-.021	-.105
将来展望	.141		-.170	.402	-.142	.388	-.363	-.172
影響受けやすさ	-.250	-.170		-.140	.132	-.094	.335	.107
自立認識	.329	.402	-.140		.086	.358	-.246	-.272
自立こだわり	.068	-.142	.132	.086		-.217	.077	-.056
対人協調	.248	.388	-.094	.358	-.217		-.368	-.200
やる気なさ	-.021	-.363	.335	-.246	.077	-.368		.223
感情非統制	-.105	-.172	.107	-.272	-.056	-.200	.223	

3. 透過性調整力を含むTEG類型と
自立・自律性の関係

(1) 透過性調整力

桂ら(1997)によれば、「バーンはそれぞれの自我状態間を自由に行き来するエネルギー(自由エネルギー)を想定し、自由に行き来するエネルギーの程度を自我状態の透過性(Permeability)と定義したと述べている。更に、桂らは、外部刺激に対して自由に自我状態を切り替える調整力を透過性調整力(Permeability Control Power)と考え、エゴグラムと合わせて表示する「PCエゴグラム」を作成した。本研究では、このPCエゴグラムを使用して、「心の切り替え」(適応力)の

程度を透過性調整力で測定、「人との交流」パターンを5つの自我状態で測定した。

交流分析の理論では、自我状態を状況に応じて適切に切り替えていくことが、健康な自我構造であるとしている。

(2) TEGエゴグラム類型化

395名のエゴグラムを、菱田ら(2011)と同様、交流分析を専門として学び類型化できる者2名で、それぞれに類型化した。その一致率は97.80%であり、一致しなかった2.2%については、両者の協議によって型を決めた。各類型の名称の付け方は、前回と同様である(菱田ら2011)。

表中のPCの高低については、桂ら(1997)の

Table 2 TEG類型化

パターン		PC値別 人数	類型別 人数	パターン		PC値別 人数	類型別 人数
TEG 優位型				TEG 混合型			
①	CP優位型 高	6	11	⑩	U型III-CP・NP・AC 高	2	4
	CP優位型 低	5			U型III-CP・NP・AC 低	2	
②	NP優位型 高	13	23	⑪	N型I-NP・A 高	13	41
	NP優位型 低	10			N型I-NP・A 低	28	
③	A優位型 高	3	3	⑫	N型II-NP・FC 高	6	18
	A優位型 低	0			N型II-NP・FC 低	12	
④	FC優位型 高	23	35	⑬	N型III-A・FC 高	1	3
	FC優位型 低	12			N型III-A・FC 低	2	
⑤	AC優位型 高	8	35	⑭	逆N型I-A・NP 高	2	2
	AC優位型 低	27			逆N型I-A・NP 低	0	
TEG 低位型				⑮	逆N型II-FC・NP 高	7	10
⑥	CP低位型 高	0	2		逆N型II-FC・NP 低	3	
	CP低位型 低	2		⑯	逆N型III-FC・A 高	10	18
⑦	NP低位型 高	1	22		逆N型III-FC・A 低	8	
	NP低位型 低	21		⑰	M型 高	31	40
⑧	A低位型 高	16	43		M型 低	9	
	A低位型 低	27		⑱	w型 高	1	7
⑨	FC低位型 高	1	7		w型 低	6	
	FC低位型 低	6		⑲	平坦型I-高 高	3	3
⑩	AC低位型 高	8	12		平坦型I-高 低	0	
	AC低位型 低	4		⑳	平坦型II-中 高	18	27
TEG 混合型					平坦型II-中 低	9	
⑪	台形型I-NP・A・FC 高	1	2	㉑	平坦型III-低 高	0	0
	台形型I-NP・A・FC 低	1			平坦型III-低 低	0	
⑫	台形型II-NP・A 高	0	1	㉒	P優位型 高	3	3
	台形型II-NP・A 低	1			P優位型 低	0	
⑬	台形型III-A・FC 高	1	1	㉓	C優位型 高	3	12
	台形型III-A・FC 低	0			C優位型 低	9	
⑭	U型I-CP・AC 高	1	4	計		395	395
	U型I-CP・AC 低	3					
⑮	U型II-CP・FC・AC 高	2	6				
	U型II-CP・FC・AC 低	4					

Table 3 分析対象とするエゴグラム類型パターンと想定自立・非自立

(第一分析)

	類 型	想定	人数
1	CP優位型	非自立	11
2	NP優位型	自立	23
3	FC優位型	自立	35
4	AC優位型	非自立	35
5	NP低位型	非自立	22
6	A低位型	非自立	43
7	AC低位型	自立	12
8	N型 I - NP・A	非自立	41
9	N型 II - NP・FC	非自立	18
10	逆N II型 - FC・NP	自立	19
11	逆N III型 - FC・A	非自立	18
12	M型	自立	40
13	平坦型 II - 中	非自立	27
14	C優位型	非自立	12
計			347

(第二分析)

	類 型	PC	想定	人数
1	CP優位型	高	非自立	6
2		低	非自立	5
3	NP優位型	高	自立	13
4		低	自立	10
5	FC優位型	高	自立	23
6		低	自立	12
7	AC優位型	高	非自立	8
8		低	非自立	27
9	NP低位型	低	非自立	21
10	A低位型	高	非自立	16
11		低	非自立	27
12	AC低位型	高	自立	8
13	N型 I - NP・A型	高	非自立	13
14		低	非自立	28
15	N型 II - NP・FC型	低	非自立	12
16	逆N II型 - FC・NP型	高	自立	7
17	逆N III型 - FC・A型	高	非自立	10
18		低	非自立	8
19	M型	高	自立	31
20		低	自立	9
21	平坦型 II - 中型	高	非自立	18
22		低	非自立	9
23	C優位型	低	非自立	9
計				330

定義により、PCが50よりも大きければ「高」、小さければ「低」とし、TEG類型の横に「高」「低」を加えて類型名としている (Table 2)。

該当標本数がごく少数であるために、分析に適さないパターンを除き、まず10人以上の14類型を対象に分析した。更に、本研究で測った透過性調整力を含む23類型について分析している。先の研究 (菱田ら2011) では、デュセイが「望ましいエゴグラム」と述べている平坦型 I - 高とA優位型を含めた15類型を分析対象としたが、本研究では、これら両類型とも該当者がごく少数であったため、分析対象に適さないと判断し除外している。

ここでは10名以上抽出されたTEG類型による分析 (第一分析) と、PC値を含む、10名以上の類型もしくは我々が分析したい類型で10名に近い類型による分析 (第二分析) の2通りの分析を試みた。両分析の対象類型パターンはTable 3の通りである。

(3) 青年の自立・自律型エゴグラム類型と非自立・非自律型エゴグラム類型の想定

菱田ら (2011) も参考にしながら本研究では、人数が10名以上いることを条件として、自立・自律類型を、NP優位型、FC優位型、AC低位型、逆N II型 - FC・NP型、M型の5類型と想定した。

PC値を含む自立・自律類型は人数が10名前後いることを条件として、NP優位型 高、NP優位型 低、FC優位型 高、FC優位型 低、AC低位型 高、逆N II型 - FC・NP型 高、M型 高、M型 低の8類型とした。

これらの自我状態を青年の自立型と想定したのは、TEG研究会の各自我状態と各パターンの定義による (Table 4)。

現代青年の自立性に関する研究(3)

Table 4 青年の自立・自律類型と想定根拠

自立・自律 類型	類型の特徴	想定根拠
NP優位型	人に優しく温かく接する、人の気持ちを理解する、世話をやくという特徴を示し、面倒見のよいタイプ。自分を犠牲にしてまで、他者に尽くすことはしない	ゆるやかではないが山型を示すことから、デュセイの「望ましい型」である「ゆるやかな山型」に準拠する。優しい他者配慮は成熟性・大人の側面であり 社会性・対人関係に関すると考えられ、自立性の「対人協調」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
FC優位型	自由で陽気にはしゃぐ好奇心旺盛なタイプ、但し周りへの気づかいが少ないので、わがままと思われる	この型はデュセイの「望ましい型」には、セルフ・コントロール型とは説明されておらず、本研究で独自に考えている。学生と接する現場で、FCの高い学生は元気があり、エネルギー溢る印象をもつこと、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」のエネルギーは心の元気さ指数でもあり、冷静に問題解決を図ることに欠けていても「FC」の元気さで、人間関係、就職活動などの問題を明るく元気に乗り越えていき、楽しく生きていると予測されることなどを根拠に、自立性の「独自性」因子を中心とした自立・自律型を想定している。
AC低位型	自分の思うとおりに行動してしまうので、行動力、指導力のある反面、周囲への気づかいや思いやりに欠ける。他人を助けるために責任を持って最前の方法で仕事をするが、他人に盲従するように仕向けるタイプ	他の自我状態に比較して、「AC」の低さが特徴であるこのタイプは、成熟につれて、「CP」が低くなれば、デュセイの「望ましい型」である緩やかな山形に向かう可能性がある。「AC」が低いことは、青年期の自立・自律型の重要な一面と考えられる。独自性があり、人からの影響は受けずに、やる気のある自立・自律型を想定している。
逆N型Ⅱ —FC・NP	「CP」「FC」が同程度に高く、「NP」「AC」が相対的に低い、「特徴は「FC」の高さにあり、人に厳しく自分に甘い自己中心的」、「思いやりのなさを特徴」とするタイプ	特徴は、「FC」の高さにあるとされ、思いやりのなさなど、未成熟な心性も示しているが、「FC」の元気なエネルギーが葛藤や困難を乗り越えさせ、楽しく、元気に生きていると予想される。成熟に向かって「NP」が高くなれば「CP」が低くなり、更に「A」が高くなれば、デュセイの「望ましい型」である緩やかな山形に向かう可能性がある。人から影響を受けない、自分の生き方をする自立・自律型を想定している。
M 型	「NP」と「FC」が同程度に高く、「CP」「A」と「AC」が相対的に低いものである。陽気にはしゃぎ、自分も楽しみ、世話好きでもあり、好感をもたれることも多いタイプ	青年期には、「A」の発達が未熟な傾向もみられ、成熟に向かって「A」が高くなれば、デュセイの言う「望ましい型」であるゆるやかな山型となる可能性も高い。「NP」と「FC」が同程度に高いことから、自立性の「対人協調」因子、「独自性」因子を中心とした自立・自律型を想定している。

Table 5 青年の非自立・非自律型と想定根拠

非自立・非自律 類型	類型の特徴	想定根拠
CP優位型	理想を追求する、リーダーシップをとる、責任感が強い、自他ともに厳しいという特徴を示し、社会的には責任ある仕事を担当する反面、頑固、融通がきかないと不評をかこつこともある。権威的で他人に従属的役割をしいるタイプ	青年期に、頑固、融通がきかないことは、柔軟に教えを受け止め吸収し、成熟に向かうことを妨げると考えられる。まだ発達途上にある青年期であることから、この型を非自立・非自律型と想定。リーダーシップ、責任感など、自立・自律性の特徴ももっていることから「CP」が下がれば、自立・自律型への移行が最も望まれる
AC優位型	「人に気づかいして「No」と言えない」、「自分で先頭に立って何かを成し遂げるといのは不得手」「デュセイは「依存者」と呼び、依存的で(自分では)なにも考えていないタイプ	この型の特性から最も非自立・自律型と想定
低位型 〔NP低位型〕 〔A低位型〕	「5尺度のうちで1つの尺度だけが低い場合」であり、「その尺度の自我状態が抑制されている」と考え、「その尺度以外の複数の高い自我機能が優勢に発揮される」タイプ NP低位型は「人に優しくない、人の世話はやきたくない反面、人に対しては厳しいので、攻撃的」、「デュセイは「かんしゃくもち」と名づけ、依存欲求が満たされないと大声で抗議し、思いやりがない」タイプ A低位型は「あまり理論的、知性的ではなく、現実認識ができていない。」、「CP、ACが高いと問題解決が難しく、葛藤状態に陥る」タイプ	これらの特性は筆者らが考えている個性豊かに自分らしく生き、社会とも適応していくパターンがもつ特性とは相反していると考えられ、非自立・自律型と想定
N型Ⅰ-NP・A N型Ⅱ-NP・FC	親の躰、教育の影響を受け、周囲に適応していく従順でありながら、自己否定の構えの「AC」が高く、感情や欲求を自由に表現する自己肯定感の構えの「FC」が低いことで、自分らしく独自性をもつ構えのないパターンであることから、非自立・自律型と考えた。 N型Ⅰ-NPAは「NP」「AC」が同程度に高く、「CP」「A」が相対的に低い、「他人に「いいえ」と言えないで利用されたり、要求以上に与えてしまう」タイプ N型Ⅱ-NPFCは「NP」「AC」が同程度に高く、「CP」「FC」が相対的に低い、「滅私奉公する傾向があり、施し上手ではあるが、自分は楽しまない」タイプ	いずれも筆者らの自立の定義に沿わないパターンである
逆N型Ⅲ-FCA	「CP」「FC」が同程度に高く、「A」「AC」が相対的に低い、「A」が低いと現実を吟味せず感情や気分がふりまわされ、うまくいかないことがあると人のせいにながらなるタイプ	「CP」「FC」が高く、「A」が低い特徴は筆者らの自立の定義に沿わないパターンである
平坦型Ⅱ-中	5尺度すべてが中程度のもので、あらゆる面において平坦的で中業出はあるが、やや個性に欠けて面白くないタイプ	元気さと個性によって自分らしさを造り上げていくと考えられる青年期では、中庸で個性に欠ける特徴は覇気に欠け、青年の自立・自律性としてはとまりすぎている特性であるとも言える。このことから自立・自律性因子との関わりは全て低いことが予測され、非自立・非自律と想定。
C優位型	「FC」「AC」が同程度に高い。いつまでも子どもの自我状態のままにふるまい、気分中心でいつも相手に依存する傾向がある。「CP」や「A」が低いと、社会義務感や責任感に欠け、社会適応が難しくなることもある。スリルがあることや好奇心のおもむくままに快楽を追求するという特徴があるタイプ	この型の特性から最も非自立・自律型と想定

第一分析の対象であるエゴグラム類型の残りの9類型と、第二分析の対象であるPC値を考慮したエゴグラム類型の残りの15類型は、TEG研究会により、非自立・非自律型と想定した (Table 5)。

(4) エゴグラム (自我状態) の解釈

各エゴグラムの解釈については、TEG研究会の解釈を用いた (Table 6)。

(5) 自立・自律性因子からみたTEG類型の特徴

菱田ら (2011) の結果も加え、本研究では相対的に青年の自立・自律的と思われる類型として先の5類型を考え、それ以外の類型は非自立・非自律類型と想定した。これらの自立・自律類型と考えられる類型を示す者の特徴を知るために、菱田ら (2011) で行った分析と同様に、我々の自立・自律性尺度因子についての因子得点平均値を求め

た (Table 7、8)。

これらの類型が自立・自律性傾向を示すとすれば、我々の自立・自律性尺度についても、影響受けやすさは低く、独自性は高く、感情非統制は低く、自立認識が高く、将来展望は明確であり、自立が単なる他者からの分離ではないと考え、対人協調が高く、甘え過ぎることもなく、倒れるまで頑張りすぎることもなく、頼るべきときは、頼るべき人に頼りつつ人生危機を乗り切ることができる適切な依存性を有していると考えられる。

ここではそれぞれの類型の自立性尺度からみた特徴として、平均値から1/2標準偏差以上隔たった因子得点を示すもの (Table 7、8) で、太字で示しているものに注目した。Table 7 は、TEG類型を示し、Table 8 は、PC値を含む類型を示している。

Table 6 エゴグラム (自我状態) の解釈

CP	自分の判断を正しいものとして譲らず、批判や非難を行う。目標が高く、理想を追求し、自分に厳しく、責任感が強く、リーダーシップを発揮する反面、他人に厳しく、自分の言い分を通し、自分の価値観を押し付ける他者否定の構えを有する
NP	他人をいたわり、親身になって世話をする、親切で、寛容的な態度や行動を示す。他人の喜びを自分のことのように喜び、人の気持ちがよくわかり、共感的である。他者肯定の構えを有する
A	事実にもとづき、客観的かつ理論的に理解し、判断する。PやCの偏見、感情、本能に左右されず、冷静に捉える。他の自我状態の調整役の構えを有する
FC	感情や欲求を自由に表現する自我状態。親の躰を受けていない部分であり、本能的、自己中心的で、好奇心、直感、創造力と関連性がある。自己肯定の構えを有する
AC	周囲に適応していく従順な自我状態。親の躰や教育の影響が大きい。ACが高いと過剰適応の不満が高じて「すねる」、「ひねくれる」のような偽りの反抗を示す。自発的な反抗ではなく、相手の言葉や態度に対する反抗である。マイナスの側面が強いが、協調性、忍耐強さなどの面も有する。自己否定の構えを有する

Table 7 エゴグラム類型別自立・自律性因子得点

		人数	独自性	将来展望	影響受けやすさ	自立認識	自立こだわり	対人協調	やる気なさ	感情非統制
自立・自律類型	NP優位	21	.285	.469	-.374	.589	-.242	.630	-.403	-.452
	FC優位	32	.190	-.059	-.224	.057	.060	.245	-.166	.044
	AC低位	11	.587	.120	-.880	.021	-.373	.308	-.536	.364
	逆NII	10	.145	-.231	-.709	.392	-.020	-.014	-.053	.122
	M	36	.309	.215	-.237	.350	-.302	.642	-.370	-.140
非自立・非自律類型	CP優位	10	.622	.665	-1.237	.477	-.158	.691	-.553	-.174
	AC優位	35	-.200	-.407	.592	-.255	.208	-.330	.432	.049
	NP低位	20	.143	-.673	.155	-.494	.601	-1.030	.985	.226
	A低位	40	-.212	.079	.356	-.393	-.278	-.118	.183	.373
	NI	40	-.440	-.001	.479	-.289	-.296	.154	-.050	.072
	NII	18	-.267	.035	.393	-.067	.118	-.082	-.231	-.286
	逆NIII	17	.181	.165	-.296	.071	-.321	-.238	.386	.350
	平坦II	27	-.067	-.009	-.266	.102	.132	.065	-.385	-.162
	C優位	12	-.566	-.320	.288	-.353	.056	-.412	.007	-.176

Table 8 PC値を含んだエゴグラム類型別自立・自律性因子得点

	人数	独自性	将来展望	影響受けやすさ	自立認識	自立 こだわり	対人協調	やる気 なさ	感情 非統制	
自立・自律類型	NP優位高	12	.637	.951	-.532	.829	-.124	.967	-.570	-.717
	NP優位低	9	-.184	-.175	-.163	.269	-.399	.180	-.180	-.099
	FC優位高	20	.412	.131	-.279	.380	-.060	.501	-.273	-.052
	FC優位低	12	-.180	-.375	-.133	-.479	.260	-.183	.013	.204
	AC低位高	7	.495	.458	-1.204	.350	-.283	.247	-.808	-.325
	逆NⅡ高	7	.014	-.473	-.757	.003	.207	-.282	.047	.300
	M高	30	.342	.313	-.355	.422	-.311	.669	-.396	-.248
	M低	6	.144	-.277	.350	-.008	-.256	.509	-.240	.397
非自立・非自律類型	CP優位高	5	-.127	.824	-1.190	.760	.099	.721	-1.031	-.703
	CP優位低	5	1.371	.506	-1.284	.194	-.416	.662	-.076	.356
	AC優位高	8	-.092	-.055	.549	-.032	.338	.102	.039	-.107
	AC優位低	27	-.233	-.511	.605	-.321	.169	-.458	.549	.096
	NP低位低	19	.094	-.738	.192	-.531	.556	-1.100	.966	.248
	A低位高	15	-.096	.253	.174	-.258	-.387	.236	-.032	.246
	A低位低	25	-.281	-.026	.465	-.475	-.213	-.331	.313	.450
	NⅠ高	12	.007	.701	.484	.130	.101	.766	-.537	-.376
	NⅠ低	28	-.631	-.302	.477	-.468	-.466	-.108	.159	.264
	NⅡ低	12	-.255	-.109	.339	-.030	.105	-.315	-.226	-.195
	逆NⅢ高	9	.129	.328	-.531	.243	-.419	.078	-.005	-.188
	逆NⅢ低	8	.240	-.020	-.031	-.122	-.211	-.595	.825	.956
	平坦Ⅱ高	18	-.114	.143	-.386	.245	-.001	.317	-.578	-.215
	平坦Ⅱ低	9	.026	-.313	-.026	-.185	.399	-.440	.001	-.057
	C優位低	9	-.548	-.452	.309	-.508	.135	-.631	.013	.039

これらの結果から自立・自律類型と考えられる類型について、非自立・非自律類型との相違に注目しながら検証すると、以下のような傾向が認められる。

まずPC値を考慮せずに、各類型について菱田ら(2011)の結果と比較すると(Table 7)、自立・自律類型では、NP優位型、M型が類似した傾向を示している。但し、各類型ごとの出現率は高くない。TEG研究会の資料でも示されているように、類型によってその出現率が低いものもあり、各類型で多くの人数を得ることは困難であると思われる。本研究でも分析対象とした類型の中には10人を切るものもあり、統計分析としては十分な数ではない。因子得点についての類型間の統計的有意性については、次の分析でみている。

統計的有意性を確認してはいないが、PC値を含む類型では、PC値の高い者は明らかに自立・自律性傾向が高いことが示されている(Table 8)。例えば、自立・自律類型と想定しているNP優位型では、PC値の高い者は、独自性、将来展望、自立認識、対人協調の傾向が強く、影響受けやすくなく、やる気はあり、感情統制ができる傾向を示しているが、PC値の低い者は、平均値が低く、全く異なる、非自立・非自律のような傾向を示している。非自立・非自律型と想定しているN型Ⅰ-NP・AでもPC値の高い者は、将来展望があり、

対人協調ができて、やる気があり、自立・自律類型のような傾向を示し、PC値が低い者は、独自性がなく、非自立・非自律傾向を示している。非自立・非自律型と想定している逆N型Ⅲ-FC・AでもPC値の高い者は、影響受けやすさは少ない傾向を示し、PC値が低い者は、対人協調ができず、やる気はなく、感情統制ができない非自立・非自律傾向を示している。非自立・非自律型と想定している平坦型Ⅱ-中でもPC値の高い者は、やる気があり、PC値が低い者は、平均値が全て低く、全く異なる傾向を示している。

非自立・非自律と想定した「CP優位型」は、人数は少ないもののPC値が高い者も低い者も自立・自律傾向を示している。具体的には、将来展望があり、影響は受けず、対人協調ができる。この他、PC値の高い者は、自立認識を持ち、やる気があり、感情統制ができる傾向を示し、PC値の低い者は、独自性が高い傾向を示した。次の類型間の差の分析でも「独自性」因子、「影響受けやすさ」因子、「対人協調」因子、「やる気なさ」因子において、非自立・非自律類型と比較して、有意に自立・自律性傾向を示したことから、青年の自立・自律類型と想定すべきであると考えられる。先にエゴグラムの解釈を述べたが、青年期においては、CPのエネルギーの高さが自立・自律性の特性と肯定的に関わっていることが窺われる。

(6) TEG 類型間の自立・自律性因子の差

次に自立・自律類型と考えられるものと非自立・非自律類型と考えられるものとの相違について、更に、これらの自立・自律類型として考えたものも、類型としては異なるものであることから、自立性因子について相違している可能性があるため、それらすべての類型間の差の有意性を確認する。方法としては、菱田ら(2011)と同様に、各類型間の自立性因子について、差を確認するための一要因分散分析を行った。

ここでは、類型間に多くの有意差が見られた「影響受けやすさ」因子、「対人協調」因子、「やる気なさ」因子の結果を示している (Table 9 ~ Table 14)。

「独自性」因子、「将来展望」因子、「自立認識」因子、「自立こだわり」因子、「感情非統制」因子では有意な差は殆ど認められなかった。

我々が注目している、甘え、適切な依存については、「自立こだわり」、「対人協調」、「やる気なさ」因子それぞれの内容にその意味するところが含まれていると考えたが、自立・自律性の要因として明らかに立証するまでに至っていない。

まず、多くの差が認められなかった各自立・自律性因子ごとの類型間の違いをみる。

①独自性因子

自分なりの考え方をもつことを特徴とする「独自性」因子には、冷静に考える「A」と、理想を追求し、責任感が強く、自他共に厳しい「CP」の関与が考えられる。ここで示された結果から、これら「A」と「CP」の関与によって自分らしい個性豊かな、自立・自律性の大切な特性である独自性が発揮されるのではないかと思われる。

「A」の関与については、「A」の低い非自立・非自立類型の「N型 I - NP・A 低」は、3自立・自律類型「NP優位型 高」、「FC優位型 高」、「M型 高」に比べ独自性が低い。「N型 I - NP・A 低」に比較して独自性が高いこれら3自立・自律性因子は、いずれもPC値が高く、類型の特性に関わらず場に応じて適切に各自我状態が使われ適応できることによって、独自性のある自立・自律性が示されたことが窺われる。

「CP」の関与については、PC値が低く心的融通性が低いものの、他者否定で自分の考えの強い

構えの「CP」が高い「CP優位型 低」が、5非自立・非自律類型「AC優位型 低」、「A低位型 低」、「N型 I - NP・A 低」、「N型 II - NP・FC 低」、「C優位型 低」に比べ独自性が高い。これら5非自立・非自律類型は、類型の違いに関わらずPC値が低く、適切な心的エネルギーの調整力が弱い為、場に応じた適応力が弱く、自分らしい独自性のある心性を示していないとも考えられる。

②将来展望因子、自立認識因子

将来を夢や希望をもって描く「将来展望」因子と、自立する方法を考えるもしくは知っている「自立認識」因子は、エゴグラム類型間に類似した違いが見られる。将来を描いたり、社会との関わりの中で独り立ちしていくことを知っているためには、他者配慮と社会性の「NP」の高さとPC値が示す適応力の強さが関与すると考えられる。「NP」が高くPC値が高い自立・自律性類型「NP優位型 高」、「M型 高」が、非自立・非自律類型「NP低位型 低」に比べ、将来展望をもち、自立認識も高い。類型の特性に加えて、適応力の高さによって前向きに将来を見据え、自立・自律の傾向を有していると推定される。

更に、これら2つの自立・自律性類型は、非自立・非自律類型「A低位型 低」、「N型 I - NP・A 低」と比べても、自立認識が高い。これら2非自立・非自律類型は、共に、考える「A」が低く、適応力低く、自ら考えつつ自立・自律性の認識を育てることは難しいことが窺える。

自立・自律類型「NP優位型 高」が、「FC優位型 低」に比べ、自立認識、将来展望共に高い。「FC優位型 低」は、PC値が低く適応力の弱いことにより、天真爛漫な元気さがあっても他者配慮、社会性のある類型に比べて自立認識が弱いことが窺われる。

自立・自律類型「NP優位型 高」は、3非自立・非自律類型「AC優位型 低」、「N型 I - NP・A 低」、「C優位型 低」と比べ、将来展望をもっている。これら3非自立・非自律類型はいずれも適応力も弱く、自分で考えることをしない未成熟な特徴のある類型であり、将来のことはあまり考えていないことが推測される。

③自立こだわり因子

頑張らなくてはならない、自力でやらなくてはならないと自立にこだわる「自立こだわり」因子については、類型間の違いは殆ど示されなかった。

非自立・非自律類型同士「NP低位型 低」が「N型I-NP・A 低」に比べ、こだわり方が強い。共にPC値が低く適応力が弱い類型であり、「NP」が低く他者配慮に欠けることは、人間関係をうまく作れず、適切に援助を求めることができないことも推測される。

PC値を含まない類型間では、自立・自律類型「M型」が非自立・非自律類型「NP低位型」に比べ、自立こだわりが低い傾向を示している。あまり考えることをせず、他者に優しく、自分も楽しむ「M型」はこだわりの少ない類型でもあり、「頑張る自立」にもこだわっていないことが窺われる。

考える「A」が低い非自立・非自律類型「A低位型」、「N型I-NP・A」も「NP低位型」に比べ、自立こだわりが低い。考えることをしない者は頑張らなくてはならないと思うことも少ないのであろうか。

④感情非統制因子

感情のコントロールができにくい「感情非統制」因子については、自立・自律類型「NP優位型 高」と「M型 高」が非自立・非自律類型「逆N型III-FC・A 低」に比べて感情のコントロールができる。感情統制のできる2自立・自律性類型は共に、社会性の「NP」とPC値が高く、類型の特性に関わらず場に応じて適切に各自我状態を使う適応力があることにより、感情統制ができているのであろう。

更に、「NP優位型 高」は、非自立・非自律類型「A低位型 低」よりも感情統制ができる結果を示した。社会性と適応力の高さが、考えることをしない類型より、感情のコントロールができることが窺われる。

次に比較的多くの類型間の違いが示された3つの自立・自律性因子「影響受けやすさ」、「対人協調」、「やる気なさ」について述べる (Table 9～14)。

⑤影響受けやすさ因子

周囲の人の影響を受けやすく、相手の意見が正しいと思いがちになる「影響受けやすさ」因子に

ついては、2自立・自律類型「AC低位型 高」、「M型 高」と、2非自立・自律類型「CP優位型 高」、「CP優位型 低」が、3非自立・非自律類型「AC優位型 低」、「A低位型 低」、「N型I-NP・A 低」(いずれもPC値が低く、適応力が低い類型)と比較して、明らかに影響受けやすさが低い、言い換えれば影響を受けにくいことが示された。類型の特性に関わらず、場に応じて適切に各自我状態が使われる適応力の高さにより、人からの影響を受けない自立・自律性を有していることが窺われる。

この他、「AC低位型 高」は、次の5類型、「AC優位型 高」、「NP低位型 低」、「A低位型 高」、「N型I-NP・A 高」、「N型II-NP・FC 低」より影響受けにくいことも示されており、自立・自律類型「AC低位型 高」は多くの非自立・非自律類型よりも影響受けにくい特徴を有する類型であることが明らかとなった。「AC低位型」の自我状態の特性にPC値が高く適応力があることによることと考えられる。

PC値を含まない類型間の比較では、自立・自律類型と想定した全ての類型が多くの非自立・非自律と想定した類型と比較して、影響受けにくい結果を示している。非自立・非自律と想定した「CP優位型」も自立・自律類型と同じく多くの非自立・非自律類型と比較して、影響受けにくい自立・自律性を示した。CPの自我状態は「自分の判断を正しいものとして譲らず、批判や非難を行う。目標が高く、理想を追求し、自分の言い分を通し、価値観を押し付ける」特徴があることから、この類型は「影響受けやすさ」が低い特徴を有する自立・自律性を有することが窺える。

⑥対人協調因子

周りとの良い関係を維持したり、思いやりがあることを特徴とする「対人協調」因子については、自立・自律類型「NP優位型 高」、「M型 高」が、8非自立・非自律類型と比較して、対人協調が高いことが示された。これらの8非自立・非自律類型は「AC優位型 低」、「NP低位型 低」、「A低位 低」、「N型I-NP・A 低」、「N型II-NP・FC 低」、「逆N型III-FC・A 低」、「平坦型II-中 低」、「C優位型 低」である。対人協調が高い類型はいずれも「NP」が高く、PC値が

高い適応力を示している。それに反して、これらの対人協調の低い8非自立・非自律類型はいずれもPC値が低く、類型の特性に関わらず場に応じて適切に各自我状態が使われず、適応力が低い。

この他、自立・自律類型「FC優位型 高」も次の5類型、「AC優位型 低」、「NP低位型 低」、「A低位 低」、「逆N型Ⅲ-FC・A 低」、「C優位型 低」に比較して、対人協調性のあることが示された。これら5類型共にPC値が低く、類型の特性に関わらず場に応じて適切に各自我状態が使われず、適応力が低い。自立・自律類型相互にも違いが見られる。「NP優位型 高」は「FC優位型 低」、「逆N型Ⅱ-NP・FC 高」より対人協調性があり、「FC優位型 低」は「NP優位型 高」、「M型 高」より対人協調性は低い。

非自立・非自律類型相互にも違いがある。「AC優位型 低」は「N型Ⅰ-NP・A 高」、「平坦

型Ⅱ-中 高」より対人協調性は低く、「NP低位型 低」は、次の6類型、「A低位型 高」、「A低位型 低」、「N型Ⅰ-NP・A 高」、「N型Ⅰ-NP・A 低」、「逆N型Ⅲ-FC・A 高」、「平坦型Ⅱ-中 高」より対人協調性は低い。「N型Ⅰ-NP・A 高」は、次の6類型、「A低位型 低」、「N型Ⅰ-NP・A 低」、「N型Ⅱ-NP・FC 低」、「逆N型Ⅲ-FC・A 低」、「平坦型Ⅱ-中 低」、「C優位型 低」より対人協調性は高い。

他にも「NP低位型 低」は、次の7類型より対人協調性は低い。それらは、自立・自律類型「NP優位型 低」、「FC優位型 低」、「AC低位型 高」、「M型 低」、非自立・非自律類型「CP優位型 高」、「CP優位型 低」、「AC優位型 高」である。

これらの多くの関わりには、「NP」の自我状態の関与が大きいと考えられる。「NP」とは「他人

Table 9-1 類型間の因子得点差の有意差 (影響受けやすさ因子)

類型	人数	因子得点	NP優位	FC優位	AC低位	逆NⅡ	M
自立・自律類型	NP優位	21	-.374				
	FC優位	32	-.224				
	AC低位	11	-.880				
	逆NⅡ	10	-.709				
	M	36	-.237				
	CP優位	10	-1.237		<		<
非自立・非自律類型	AC優位	35	.592	>>	>>>	>>>	>>
	NP低位	20	.155		>		
	A低位	40	.356		>>>	>	
	NⅠ	40	.479	>>	>	>>>	>>
	NⅡ	18	.393		>>	>	
	逆NⅢ	17	-.296				
	平坦Ⅱ	27	-.266				
	C優位	12	.288			>	

(注)>>>、>>、>左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001, p<.01, p<.05)

Table 9-2 類型間の因子得点差の有意差 (影響受けやすさ因子)

類型	人数	因子得点	CP優位	AC優位	NP低位	A低位	NⅠ	NⅡ	逆NⅢ	平坦Ⅱ	C優位
自立・自律類型	NP優位	21	-.374					<<			
	FC優位	32	-.224	>	<<			<			
	AC低位	11	-.880		<<<	<	<<	<<<	<<		<
	逆NⅡ	10	-.709		<<		<<	<<	<		
	M	36	-.237	>	<<		<<	<<			
	CP優位	10	-1.237		<<<	<<<	<<<	<<<	<<<		<<
非自立・非自律類型	AC優位	35	.592	>>>					<	>>	
	NP低位	20	.155	>>>							
	A低位	40	.356	>>>							
	NⅠ	40	.479	>>>						>	
	NⅡ	18	.393	>>>							
	逆NⅢ	17	-.296		<						
	平坦Ⅱ	27	-.266		<<			<			
	C優位	12	.288	>>							

(注)>>>、>>、>左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001, p<.01, p<.05)

Table 10-1 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差(影響受けやすさ因子)

類型	人数	因子得点	NP優位	NP優位	FC優位	FC優位	AC優位	逆NII	M	M
			高	低	高	低	高	高	高	低
			-.532	-.163	-.279	-.133	-1.204	-.757	-.355	.350
自立・自律類型	NP優位高	12	-.532							
	NP優位低	9	-.163							
	FC優位高	20	-.279							
	FC優位低	12	-.133							
	AC優位高	7	-1.204							
	逆NII高	7	-.757							
	M高	30	-.355							
	M低	6	.350							
非自立・非自律類型	CP優位高	5	-1.190							
	CP優位低	5	-1.284							
	AC優位高	8	.549				>>			
	AC優位低	27	.605	>	>		>>>	>	>>	
	NP優位低	19	.192				>			
	A優位高	15	.174				>			
	A優位低	25	.465				>>>		>	
	NI高	12	.484				>>			
	NI低	28	.477				>>>		>	
	NII低	12	.339				>			
	逆NIII高	9	-.531							
	逆NIII低	8	-.031							
	平坦II高	18	-.386							
	平坦II低	9	-.026							
	C優位低	9	.309					>		

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

Table 10-2 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差(影響受けやすさ因子)

類型	人数	因子得点	CP優位	CP優位	AC優位	AC優位	NP優位	A優位	A優位	NI	NI	NII	逆NIII	逆NIII	平坦II	平坦II	C優位
			高	低	高	低	低	高	低	高	低	低	高	低	高	低	低
			-1.190	-1.284	.549	.605	.192	.174	.465	.484	.477	.339	-.531	-.031	-.386	-.026	.309
自立・自律類型	NP優位高	12	-.532				<										
	NP優位低	9	-.163														
	FC優位高	20	-.279				<										
	FC優位低	12	-.133														
	AC優位高	7	-1.204			<<	<<<	<	<	<<<	<<	<<<	<				<
	逆NII高	7	-.757				<										
	M高	30	-.355				<<		<		<						
	M低	6	.350														
非自立・非自律類型	CP優位高	5	-1.190			<	<<		<<	<	<<						
	CP優位低	5	-1.284			<	<<		<<	<	<<	<					
	AC優位高	8	.549														
	AC優位低	27	.605	>>	>>										>		
	NP優位低	19	.192														
	A優位高	15	.174														
	A優位低	25	.465	>>	>>												
	NI高	12	.484	>	>												
	NI低	28	.477	>>	>>												
	NII低	12	.339		>												
	逆NIII高	9	-.531														
	逆NIII低	8	-.031														
	平坦II高	18	-.386				<										
	平坦II低	9	-.026														
	C優位低	9	.309														

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

Table 11-1 類型間の因子得点差の有意差(対人協調因子)

類型	人数	因子得点	NP優位	FC優位	AC優位	逆NII	M
			高	低	高	高	高
			.630	.245	.308	-.014	.642
自立・自律類型	NP優位	21	.630				
	FC優位	32	.245				
	AC優位	11	.308				
	逆NII	10	-.014				
	M	36	.642				
非自立・非自律類型	CP優位	10	.691				
	AC優位	35	-.330	<<<			<<<
	NP優位	20	-1.030	<<<	<<<	<	<<<
	A優位	40	-.118	<			<<<
	NI	40	.154				
	NII	18	-.082				<
	逆NIII	17	-.238	<			<<
	平坦II	27	.065				
C優位	12	-.412	<<			<<	

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

現代青年の自立性に関する研究(3)

Table 11-2 類型間の因子得点差の有意差 (対人協調因子)

類型	人数	因子得点	CP優位	AC優位	NP優位	A優位	NI	NII	逆NIII	平坦II	C優位
自立・自律類型	NP優位	21	.630		>>>	>>>	>				>>
	FC優位	32	.245		>>>						
	AC優位	11	-.308		>>>						
	逆NII	10	-.014		>						
	M	36	.642		>>>	>>>	>>>		>	>>	>>
	CP優位	10	.691		>>	>>>					>
非自立・非自律類型	AC優位	35	-.330	<<	>						
	NP優位	20	-1.030	<<<	<	<<<	<<<	<<		<<<	
	A優位	40	-.118		>>>						
	NI	40	-.154		>>>						
	NII	18	-.082		>>						
	逆NIII	17	-.238								
	平坦II	27	.065		>>>						
	C優位	12	-.412	<							

(注)>>>、>>、>左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

Table 12-1 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差 (対人協調因子)

類型	人数	因子得点	NP優位高	NP優位低	FC優位高	FC優位低	AC優位高	AC優位低	逆NII高	M高	M低
自立・自律類型	NP優位高	12	.967				>>		>		
	NP優位低	9	.180								
	FC優位高	20	.501							<	
	FC優位低	12	-.183	<<							
	AC優位高	7	.247								
	逆NII高	7	-.282	<							
	M高	30	.669			>					
	M低	6	-.509								
	CP優位高	5	.721								
	CP優位低	5	.662								
非自立・非自律類型	AC優位高	8	.102								
	AC優位低	27	-.458	<<<	<<<				<<<		
	NP優位低	19	-1.100	<<<	<<<	<<<	<	<<	<<<	<<<	
	A優位高	15	.236			<<			<<<		
	A優位低	25	-.331	<<<		<<			<<<		
	NI高	12	.766								
	NI低	28	-.108	<<					<<<		
	NII低	12	-.315	<<					<<		
	逆NIII高	9	-.078								
	逆NIII低	8	-.595	<<<		<			<<<		
平坦II高	18	.317									
平坦II低	9	-.440	<<<						<<		
C優位低	9	-.631	<<<		<<				<<<		

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

Table 12-2 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差 (対人協調因子)

類型	人数	因子得点	CP優位高	CP優位低	AC優位高	AC優位低	NP優位高	NP優位低	A優位高	A優位低	NI高	NI低	NII高	NII低	逆NIII高	逆NIII低	平坦II高	平坦II低	C優位低	
自立・自律類型	NP優位高	12	.967				>>>	>>>	>>>			>>	>>							>>>
	NP優位低	9	.180					>>>												
	FC優位高	20	.501				>>>	>>>	>>							>				>>
	FC優位低	12	-.183					>												
	AC優位高	7	.247					>>												
	逆NII高	7	-.282																	
	M高	30	.669				>>>	>>>		>>>		>>>	>>			>>>			>>	>>>
	M低	6	-.509					>>>												
	CP優位高	5	.721					>>>												
	CP優位低	5	.662					>>>												
非自立・非自律類型	AC優位高	8	.102					>>												
	AC優位低	27	-.458								<<<							<		
	NP優位低	19	-1.100	<<<	<<<	<<			<<<	<	<<<	<<<			<<			<<<		
	A優位高	15	.236					>>												
	A優位低	25	-.331					>			<<									
	NI高	12	.766				>>>	>>>		>>		>	>			>>			>	>>>
	NI低	28	-.108					>>>			<									
	NII低	12	-.315								<									
	逆NIII高	9	-.078					>>												
	逆NIII低	8	-.595								<<									
平坦II高	18	.317				>	>>>													
平坦II低	9	-.440								<										
C優位低	9	-.631								<<<										

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

をいたわり、親身になって世話をする、親切で、寛容的な態度や行動を示す。他人の喜びを自分のことのように喜び、人の気持ちがよくわかり、共感的である」特徴をもつ。比較している類型間の内、「NP」の高いタイプのほうが低いタイプよりも対人協調性が高いと言える類型が多い。「NP優位型 高」、「NP低位型 低」が、その典型である。

⑦やる気なさ因子

人に頼って楽に過ごしたい、面倒なことは人によって欲しいなど自分でやるのは面倒な傾向のある「やる気なさ」因子について見ると、「AC優位型 低」と「NP低位型 低」が、自立・自律型類型と非自立・非自律型タイプの多くの類型に比べてやる気が低い。これら2類型は共にPC値が低く適応力が弱い。加えて「AC」が高ければ、依存性が高く、自主的なやる気は低であろうし、「NP」が低ければ他者配慮ができず、社会性も低

いことから、適応力の弱い、やる気のない生き方になるであろう。

2類型共通に関与が見られる類型は自立・自律型では「NP優位型 高」、「AC低位型 高」、「M型 高」、であり、非自立・非自律型では「CP優位型 高」、「N型 I - NP・A 高」、「平坦型 II - 中 高」である。これらはPC値が高いことから類型の特徴に関係なく適応力があり、やる気のある心性を示していると考えられる。

この他「AC優位型 低」は、自立・自律型「AC優位 高」より、やる気が低い。PC値の高低が効いている違いと思われる。

「NP低位型 低」は、他に「FC優位型 高」、「A低位型 高」、「N型 II - NP・FC 低」より、やる気が低い。PC値が高い2類型は適応力も高くやる気のある元気な心性であろうし、PC値が低くても社会性、他者配慮の効いている「NP」が

Table 13-1 類型間の因子得点差の有意差 (やる気なさ因子)

類型	人数	因子得点				
		NP優位	FC優位	AC低位	逆N II	M
自立・自律型						
NP優位	21	-.403				
FC優位	32	-.166				
AC低位	11	-.536				
逆N II	10	-.053				
M	36	-.370				
非自立・非自律型						
CP優位	10	-.553				
AC優位	35	.432		>		>>
NP低位	20	.985	>>>	>>>	>	>>>
A低位	40	.183				
N I	40	-.050				
N II	18	-.231				
逆N III	17	.386				
平坦 II	27	-.385				
C優位	12	.007				

(注) >>>、>>、>左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001, p<.01, p<.05)

Table 13-2 類型間の因子得点差の有意差 (やる気なさ因子)

類型	人数	因子得点	CP優位	AC優位	NP低位	A低位	N I	N II	逆N III	平坦 II	C優位
自立・自律型											
NP優位	21	-.403		<	<<<						
FC優位	32	-.166			<<<						
AC低位	11	-.536		<	<<<						
逆N II	10	-.053			<						
M	36	-.370		<<	<<<						
非自立・非自律型											
CP優位	10	-.553		<	<<<						
AC優位	35	.432	>							>>	
NP低位	20	.985	>>>			>	>>>	>>>		>>>	>
A低位	40	.183			<						
N I	40	-.050			<<<						
N II	18	-.231			<<<						
逆N III	17	.386									
平坦 II	27	-.385		<<	<<<						
C優位	12	.007			<						

(注) >>>、>>、>左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001, p<.01, p<.05)

高ければ、NPが低い類型より、やる気は高いであろう。

この他、非自立・非自律類型「逆N型Ⅲ－FC・A 低」は、3自立・自律類型と3非自立・非自律類型に比べてやる気が低い。3自立・自律類型とは、「NP優位型 高」、「AC低位型 高」、「M型 高」であり、3非自立・非自律類型とは、「CP優位型 高」、「N型Ⅰ－NP・A 高」、「平坦型－中 高」である。これらの違いについては、やる気が高い類型全てPC値が高く、やる気が低いほうはPC値が低いことの関与が考えられる。類型の特性に関わらず、PC値が高ければ、場に応じて適切に各自我状態が使われ適応できる

が、PC値が低ければ適応力が弱い。

非自立・非自律類型「平坦型Ⅱ－中 高」は「A低位型 低」に比べ、やる気が高い。これら2類型共非自立・非自律類型と想定しているが、PC値が高いほうが、やる気のあることを示している。

以上、自立・自律性因子ごとにTEG 類型間の差の比較をした。大学生の自立・自律性と考えられる5類型（NP優位型、FC優位型、AC低位型、逆N型Ⅱ－FC・NP、M型）と、これらの類型のPC値高、PC値低の類型を自立・自律類型としたが、AC低位型 低は4名、逆N型Ⅱ－FC・NP 低は3名だったため除外した。非自立・非自律類

Table 14-1 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差(やる気なさ因子)

類型	人数	因子得点	NP優位	Np優位	FC優位	FC優位	AC低位	逆NⅡ	M	M
			高	低	高	低	高	高	高	低
自立・自律類型										
NP優位高	12	-.570								
Np優位低	9	-.180								
FC優位高	20	-.273								
FC優位低	12	.013								
AC低位高	7	-.808								
逆NⅡ高	7	.047								
M高	30	-.396								
M低	6	-.240								
非自立・非自律類型										
CP優位高	5	-1.031								
CP優位低	5	-.076								
AC優位高	8	.039								
AC優位低	27	.549	>>				>>		>>	
NP優位低	19	.966	>>>		>>>		>>>		>>>	
A優位高	15	-.032								
A優位低	25	.313								
NⅠ高	12	-.537								
NⅠ低	28	.159								
NⅡ低	12	-.226								
逆NⅢ高	9	-.005								
逆NⅢ低	8	.825	>				>		>	
平坦Ⅱ高	18	-.578								
平坦Ⅱ低	9	.001								
C優位低	9	.013								

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

Table 14-2 PC値を含んだ類型間の因子得点差の有意差(やる気なさ因子)

類型	人数	因子得点	CP優位	CP優位	AC優位	AC優位	NP優位	A優位	A優位	NⅠ	NⅠ	NⅡ	逆NⅢ	逆NⅢ	平坦Ⅱ	平坦Ⅱ	C優位
			高	低	高	低	低	高	低	高	低	低	高	高	低	高	低
自立・自律類型																	
NP優位高	12	-.570				<<	<<<										
Np優位低	9	-.180															
FC優位高	20	-.273															
FC優位低	12	.013															
AC低位高	7	-.808				<<	<<<										
逆NⅡ高	7	.047															
M高	30	-.396				<<	<<<										
M低	6	-.240															
非自立・非自律類型																	
CP優位高	5	-1.031				<<	<<<										
CP優位低	5	-.076															
AC優位高	8	.039															
AC優位低	27	.549	>>							>					>>>		
NP優位低	19	.966	>>>						>	>>>		>>			>>>		
A優位高	15	-.032					<										
A優位低	25	.313															
NⅠ高	12	-.537				<	<<<										
NⅠ低	28	.159															
NⅡ低	12	-.226					<<										
逆NⅢ高	9	-.005															
逆NⅢ低	8	.825	>>												>>		
平坦Ⅱ高	18	-.578				<<<	<<<		<					<<			
平坦Ⅱ低	9	.001															
C優位低	9	.013															

(注)>>>、>>、> 左側類型が上側類型より因子得点が大、<<<、<<、< 左側類型が上側類型より小(各p<.001,p<.01,p<.05)

型についても同じように10名以上の類型を基本とした類型にCP優位のPC値高低を加えた。CP優位については、PC値を含まない11名の類型で因子得点の平均をみたところ興味深い結果であったため、CP優位型 高は6名、CP優位型 低は5名であったが、分析対象類型に加えている。

自立・自律性因子ごとの類型間の比較について検証してきたが自立・自律類型と考えられる類型を自立・自律性因子で明確に説明しきれてはいない。その理由として、PC値を含む類型に分けることで、類型別人数が小さくなったこと、我々の自立・自律性尺度の信頼性・妥当性の検証が十分ではないこと、などがあげられる。

本研究の目的の一つに、自立・自律性に適切な依存特性を加えて考えているが、因子分析において、明らかに適切な依存と考えられる因子の抽出が十分ではなく、更なる検討が必要である。

これらの検討課題も含めて次項で、全体的考察を試みる。

V 全体的考察

菱田ら(2011)では、我々が作成した自立・自律性尺度の7因子によって、各自立・自律類型と想定したTEG類型が、どのような自立・自律性の様相をした類型であるかを明らかにすることを試みた。

本研究では、目的の一つとして透過性調整力を加えたエゴグラム類型が示す自立・自律類型の様相を我々の自立・自律性尺度によって明らかにすること、透過性の高低によって、自立・自律性に違いがあることを示すことにあった。

PC値を含む類型を分析対象としたことで、分析対象類型の数が多くなり、各類型の人数が少なくなった。このことにより数多くの類型を統計的に分析対象とできなくなるなどの課題は残ったものの、透過性調整力を含むエゴグラム類型を自立・自律性尺度の8因子で説明を試み、興味深い結果も得られた。

各自立・自律性因子についての類型間の有意差に注目したが、それによれば、「影響受けやすさ」、「対人協調」、「やる気なさ」の各因子では、多くの類型間で差が認められたが、「独自性」、「将来展望」、「自立認識」、「自立こだわり」、「感情非統制」

の各因子では有意な差は殆ど認められなかった。

我々が注目している、甘えや依存否定傾向(不適切な依存)、適切な依存については、「やる気なさ」、「自立こだわり」、「対人協調」、因子それぞれの内容にその意味するところが含まれていると考えられるが、自立・自律性の要因として明らかに立証するまでに至っていない。これらの因子について、TEG類型間の相違にも明らかな関連を認めることが難しく、適切な他者依存に関しては、更なる検討が必要である。

成熟した大人の適切な依存性に向かう、青年の適切な依存性を測る尺度については、引き続き検討していく。

Table 7、Table 8に示された結果は先に述べたように、慎重な読み取りが必要であるため、参考程度の読み取りとすべきであるが、CP優位型の示す傾向は興味深い。CPは、親などの養育者から取り入れた批判的な自我状態であり、本研究の「自立こだわり」因子の項目内容との関与が大きいと考えられる。「CP優位 高」、「CP優位 低」共に、将来展望があり、影響は受けやすくなく、対人協調にたけている。「CP優位 高」は、加えて、自立認識が高く、やる気があり、感情統制もできている。「CP優位 低」は、加えて、独自性が高い傾向を示した。PC高の類型には適応力の高さが反映していると思われ、PC低は適応力が低く、適応力の機能の働きが少ないことにより、CPの自我状態の特性そのものが強く反映している傾向とも思える。今後、検定も加え、より多くの標本を対象として、CPの自我状態に注目しつつ、青年の自立・自律類型の検討を重ねたい。

この他、各自我状態の特性と各自立・自律性因子との関連がいくつか明らかとなった。

その一つは、NPの自我状態である。TEG研究会によれば、NPは「他人をいたわり、親切で寛容的な他者肯定の構え」の自我状態であるが、「対人協調」因子において、多くの類型に比べ、対人協調力が高い結果を示した。読み取りに注意は必要であるが、Table 8では、「NP優位型 高」は、「自立こだわり」因子以外全ての因子の傾向を強く示し、独自性があり、将来展望を持ち、影響は受けやすくなく、自立認識を持ち、対人協調にたけていて、やる気があり、感情統制ができている、

好ましい自立・自律性傾向の高さを示した。NPの自我状態は、他人に、思いやりのある優しさで関わりと考えられ、この結果を示したとも推測される。言い換えれば、自立・自律性の対人協調の特性には、NPの自我状態の関与が大きく、この自我状態を高くすることで対人協調の特性を獲得できるとも考えられる。

二つ目は、ACの自我状態である。TEG研究会によれば、ACは「周囲に適応していく従順な自我状態である。ACが高いと従順で、他人に依存し、感化されやすい。周囲に合わせようとし過ぎるため、他人の言うことに左右されやすく、主体性に欠ける」とし、すねる、ひねくれる、というような偽りの反抗を示す、とされている。この内容は、「周りの人の意見に流されやすい」、「簡単に周囲の人の影響を受けてしまう」、「相手の意見にすぐ納得してしまう」などの「影響受けやすさ」因子の特性と類似しており、「影響受けやすさ」の心性には、ACの自我状態の働きが大きく関与していると考えられる。「影響受けやすさ」因子について、「AC優位型 低」は、適応力の効力が低く、その影響を受けないため、ACの自我状態の特性そのものが機能し、多くの自立・自律性類型に比較して影響受けやすい特徴を示したのではないかと考えている。ACの自我状態は、反抗を含んだ従順性として、研究され、注目されており、ACの高い自我状態は、非自立・非自律類型の典型の一つとみなしてきたことが、この結果により支持されたと考えている。

菱田ら(2011)では、FCの自我状態に注目したが、本研究では、青年の自立・自律にCPの自我状態が働いていることが推測されたこともあり、CPの自我状態に注目しつつ、青年の自立・自律性を更に調べたい。

交流分析の研究では、NP,A,FCの自我状態が高く、CP,ACの自我状態が相対的に低い類型を適応の効いた自立・自律類型としているが、青年の自立・自律性は、大人の自立・自律性に向かうものであり、本研究で想定した自立・自律類型にCP優位類型を加えることも検討したい。

透過性調整力が高ければ、類型の特性に関わらず適応できるとする理論は、本研究の分析、検討である程度明らかにされたものの、PC値の高低

種類の違いを類型間の比較では、ほとんど明らかにすることはできなかった。引き続き検討、検証が必要である。

<文献>

- ・ デュセイ・M・ジョン 1980 『エゴグラム』 池見西次郎監修 新里里春訳 創元社、全291頁
- ・ 菱田陽子・加藤礼子・金子劭榮 2010 「現代青年の自立性に関する研究：自立・自律性尺度作成の試み」 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』 第2号 第1分冊、157-168
- ・ 菱田陽子・野口喜美代・金子劭榮 2011 「現代青年の自立性に関する研究(2)：交流分析における自我状態と自立性」 『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』 第3号、291-302
- ・ 菱田陽子 2013 『気づきの心理学 交流分析:自立・自律と甘え・依存』 北陸学院大学 臨床発達心理学研究会出版グループ、全166頁
- ・ 菱田陽子・野口喜美代 2013 「現代青年の自立性に関する研究(2)：交流分析における自我状態と自立性」 『日本教育心理学会第55回総会発表論文集』 467
- ・ 桂戴作・新里里春・水野正憲 1997 『PCエゴグラム：PCE PCエゴグラム手引き』 適性科学研究センター、全71頁
- ・ スチュアート・イアン著(諸永好孝訳) 1998 『エリック・バーン：TA(交流分析)の誕生と発展』 チーム医療、全192頁
- ・ 東京大学医学部診療内科 末松弘行・和田迪子・野村忍・俵里英子 1989 『エゴグラム・パターン：TEG東大式エゴグラムによる性格分析』 金子書房、全162頁
- ・ 東京大学医学部診療内科TEG研究会編 2002a 『新版TEG解説とエゴグラム・パターン』 金子書房、全99頁
- ・ 東京大学医学部診療内科TEG研究会編 2002b 『新版TEG活用事例集』 金子書房、全112頁
- ・ 東京大学医学部診療内科TEG研究会編 2006 『新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン』 金子書房、全90頁

本研究は、北陸学院大学における他大学教員との共同研

究補助金を得て、富山クリエイティブ専門学校長、NPO
交流分析協会北陸支部長の野口喜美代先生と実施したも
のである。